

社会学の教祖は家計簿好き コントが残した肉食の証明

オーギュスト・コント（一七九八〜一八五七）知る人ぞ知る、社会学の創始者である。コントは、フランス革命中の一七九八年、モンペリエに生まれ、革命後の自由・平等思想の下に育った。理想的な社会をつくるには、個人主義でなく、社会を科学的、実証的に研究する必要があるとして、「社会物理学」を提唱、「実証哲学講義」などの著作を残して社会学の祖となった。

が、こうしたタイプの人間にありがちな奇行や珍談も少なくなく、コントは親友のミルをつかまえては、自分は無知でいやしい女と結婚したと嘆き、「自分の結婚はまるで内乱だ」「自分の結婚生活は不断の決闘だ」などといった激しい手紙などを書き送っている。ちなみに彼は、十七年目になって、やっと結婚を解消することができたとか。

それはともかく、フランス革命後のパリ市民の生活について、追跡、研究しているJ・P・アロンによると、このコント先生、こともあろうに、毎日家計簿をつけるのが趣味だったという。「こともあろうに」などと、いささかやゆ的にいうのは、あとで理由を明かすが、ともかくアロンが紹介している一八四三年五月五日の記録を見てみると

○冬チコリー 25サンチム ○レバー、野菜、牛乳 30サンチム ○バター、香草、

タマゴ 30サンチム ○アスパラガス、1フラン10サンチム ○牛フィレ肉、1フラン

60サンチム とあり、これは当時の物価から「量」に換算すると、牛肉1フラン六十サンチムは約一・五キログラム。バターとタマゴはそれぞれバター百グラム、タマゴ二個。牛乳は一リになり、肉はおそらく二日分だったのだろうという。ちなみにコントは、このときお手伝いのソフィーとネコとの二人一匹暮らしだったというから、一日当たりにして、肉三百五十グラム、バター約四十五グラム、パン二百グラム、牛乳〇・三リなど、しめて二千三百〜二千四百グラムにもなり、いまの日本人並みの豊かな食卓だったことがうかがえる。

ところでこのコント、その几張面ぶりを發揮して、妻はもとよりお手伝いさんにいたるまで、友人、知人も含めて多額の終身年金を与えると遺言した。

しかし、調べてみたところ、残っているのはおびただしい借金の山。唯一、社会学の資料として役に立ったのが家計簿だったという。

